

ヒグマ

■■■■■特 集■■■■■

クマとの遭遇～研究者の体験から

クマに出くわしたらどうするか。人慣れさせない、生ゴミを始末する。音を立てる…。いろんな予防策はあるが、ぱったり出くわしてしまったら、その瞬間は自分の判断で何とか切り抜けるしかない。

北海道の内外で何十回も何百回もクマと向



き合っている研究者に、その体験と対処法、そして、クマとはどんな生き物かを聞いた。

■山中正実さん（斜里・知床博物館長）

基本的なクマ対抗手段は撃退スプレーですね。ナタを持つこともあります。それで戦おうとは思いません。山の道具です。

実はヒグマに襲われてスプレーを発射したことはないんです。こちらから問題クマを追い払いするために噴射することばかり。ヒグ



マはそんなに攻撃的ではありません。

択捉島に調査に行ったときです。必須の護身用なので、いつも使ってるスプレーを持って行きました。何度もヒグマを見かけましたが、幸



い、スプレーを使うほどの接近遭遇はありませんでした。

戻ってから知床の道路脇に出てきたクマを追い払うため噴射したら、なんか変なのです。クマはぶっ飛んで逃げていったのですが、噴射したガスが白っぽい。本来なら黄色いトウガラシエキスが出て、刺激臭がするのにです。

気づいてしまいました。自分が頼りにして持ち歩いていたのは、練習用の無害なただの白煙噴霧スプレーだったと。択捉ではこれを頼りに、

クマと向き合っていたのですから、何ともはやです。

スプレーの忌避効果ですが、ある程度慣れてしまう奴もいます。すっ飛んで逃げるのではなく、少し離れるくらいに。ただ、スプレーをかける人や車はしっかり識別しますね。対策スタッフやその車が近づくと、さっさと離れていく。人間の顔まで覚えているんじゃないかと思えます。

■釣賀一二三さん（道立総合研究機構道南野生生物室長）

撃退スプレーをいつも携帯していて、ヒグマに向けて構えたことは何度もありますが、実際に噴射したことはないです。

一番近い遭遇は、ある夏の調査の時です。沢底の倒木をひょいと回り込んだらクマがいました。足元を見て歩き、顔を上げたら文字通り目の前にいたんです。スプレーを抜いて構える暇もありません。

幸い、犬が一緒だったので、クマの方がぶっ飛んで逃げてくれました。川筋で、音が聞こえにくい、匂いが届かない、視界が効かない、と悪条件が重なったんですね。普段はホーイホーイと声を出して歩くので、結構効果があると思うのですが。

ナタは左腰に下げています。スプレーは右。いざとなったらスプレーを頼りますね。ナタは枝払いなどの道具、武器ではありません。

■佐藤喜和さん（酪農学園大教授）

2010年のアメリカ留学中、イエローストーン国立公園でクマ対策の実習をしました。捕獲や麻酔、放獣など、かなりグリズリー（ヒグマ）に接する仕事です。

米国のレンジャーたちの仕事ぶりがすごい。クマに気迫で向かっていくんです。

ワナで捕獲したクマに麻酔をかけていた時のことです。犬が吠えたので振り向くと、別の大きなクマが近づいてくる。どうやらワナに

仕掛けた肉に執着しているらしいのです。

レンジャーの1人が向かいました。右手にマグナム弾を込めた大口徑ライフル、左手に撃退スプレー。反動が大きい銃なので、片手撃ちなんてできるわけがありません。ただ気迫でその



場から追い払おうとする作戦です。

私ともう一人のレンジャーがスプレーを構えました。クマとの距離が5mくらいだったでしょうか。2人同時にスプレーを噴射しました。黄色いガスがクマの顔面を覆い、クマはあっさり、スタスタと引き返していきます。

そういう時って、人間はつい追ってしまうのですね。レンジャーがクマの後を追いました。黄色いガスのもやの中に彼が吸い込まれていくのを、スローモーションみたいに見ていました。

トウガラシガスをまともに吸い込んで、彼は目から涙、くしゃみが止らず、しばらくは動けませんでした。

ワナに仕掛ける肉は新鮮な方がいいとレンジャーたちは信じています。公園の一角に、交通事故で死んだ草食獣を廃棄する場所があります。そこには何頭ものクマが入れ替わりでやって来て死体を食べています。クマを餌付けしているような、とても危険な場所です。

クマ担当レンジャーって、どこか変ですね。アドレナリン全開で死体に餌付いているクマに向かっていきます。クマが抱え込んで食べているバイソンを横取りするため、車で突っ込ん

でいくのです。

100mほど手前でいったん停車し、ハードロックを最大音量で鳴らして気合いを入れます。そこから急発進し、死体の上に仁王立ちになっているクマめがけて突進して、追い払うのです。すかさず車から降りると、ショットガンを構え、「ハイ、ベア！　　ハイ、ハイベア！」と怒鳴りながら。クマが仕方なく離れたすきに、大急ぎで新鮮なもも肉を切り取ります。

つくづく、大型獣と向き合うのは気合いだと実感しました。

北海道ではここまでの経験はしませんが、もしもふらふらと寄ってくるようなヒグマに出くわしたときは、こっちが逃げ腰にならず、気力を出すことが大事だと思います。

「ナタで戦う」というのも、その気迫や覚悟は大事だと思いますが、現実的な効果では私はスプレーを選びます。

クマは怖い、襲ってくるケダモノ、という漠然としたイメージではなく、同じ生き物として向き合うことが大切です。

私たち研究者も、科学的な成果や論文だけではなく、そうしたメッセージも社会に発信していかないといけない、と感じています。

(聞き手・山本牧)

【現地レポート・札幌】

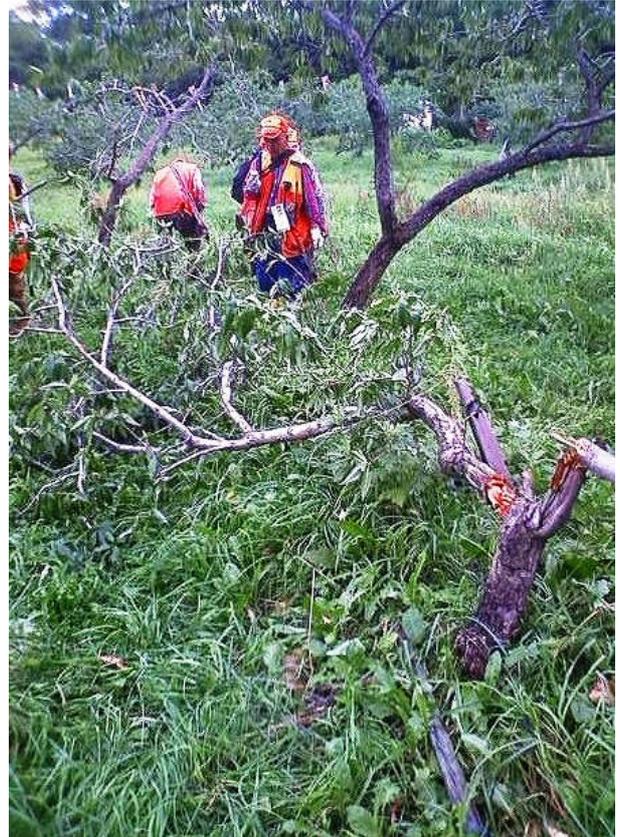
クマ出没地域の住民の気持ち

大坂義臣（狩猟者、北大大学院、団体職員）

★やっぱりクマっているよね…

札幌では3年前、円山公園など市街地付近にヒグマが出没し、ニュースをにぎわした。それ以降、毎年、恒例行事のように目撃があり、カメラが現場から生放送をしたりする。記者が「この場所でクマが目撃されました…」と解説すると、「クマ出没なんて遠くの出来事」と思って

いた市民も、「札幌にもいるんだねえ」と、クマの“存在”を良くも悪くも受け止めているよ



うだ。

私も知人から「ねえやっぱりクマは怖いの？　食べられちゃうの？　でも動物園で見たらかわいいのに」と苦笑いするしかないような質問をされることがある。

「まあ、変な動機がなければ、人間を見つけて食べてやろうと目の色変えて追っかけてくるわけではないけどさあ…」

そりゃそうだ、一般の人はテレビや書籍、さまざまな話題から漠然としたイメージを作り上げる。かくいう私も野生動物に関わる以前はそうだった。

また、ほとんどの人は自身の生活圏や日常で「野生動物」の存在を意識することはないだろう。あったとしても、ドライブ中にキタキツネやエゾシカに会い、「うわー」と感嘆し、「見られてよかったね」と思う、いわゆる非日常的な出会いだ。

私は札幌市南区白川にある野外教育施設に勤めているが、この地域は昔から農業を営んでいる方々がほとんどだ。白川（しらかわ。また



は、しらいかわ) といっても、札幌市民でも「どこ、それ!？」というほどマイナーな地域だ。

明治中ごろに開拓され、豊平川左岸の河岸段丘に果樹園が連なり、農家ごとの直売店があって新鮮な果実が手に入る、「ほっこり」するような地区だ。一方、豊平川対岸の藤野地区は戸建て住宅地が広がり、学校や商業施設、国道230号が通る、ごく普通の住宅市街地だ。

この白川地区の住民、といってもほぼ農家であるが、顔を合わせると野生動物の話題になることが多い。「アライグマにトウキビやられた」「今日もタヌキが車に轢かれていた」「〇〇さんの番犬が昨日の夜、やたらと吠えていたからクマがそろそろ来たかなあ」。特にみんなが集う白川神社の祈願祭や豊穰祭では、そんな話題が繰り返され、札幌市内とはいえ、日常的に野生動物の存在を意識させられる。

3年前、果樹園の木がヒグマにひどく食害さ

れてから防除意識が高まり、ほぼすべての農家が電気柵を設置している。これは春～秋のクマ対策に限らず、冬にリンゴの枝や樹皮を食い荒らすエゾシカの防除策としても活用されている。

★クマが写ってたさ

白川地区の農家は、春は山菜、秋にはきのこを求めて裏山に出かける人が多い。今年の白川地区でクマの痕跡・目撃の通報件数は今のところ「例年並み」という感じだが、ある人が「この間、ラクヨウ（落葉きのこ）採りに行ってクマ見たよ」。別の人は「家の横の小川の脇を朝方歩いてたわ」と話してくれた。

行政や警察に連絡したようすはなく、「別に悪いこと（食害や頻繁な出没）しているわけではないからさ」と、案外平静に受け止めている。印象的だったのが、近隣の農家にうかがった際、「そういえば、カメラにクマが写ってさあ」と写真を見せてくれた時だ。幸い被害はなく、写真の説明をしてくださる様子は、楽しそうというか、「写ってよかった」という雰囲気だった。「ここに時々来るクマはこんな奴だったのか!」と納得していたようにも見える。

★揺れるヒグマ意識

農家の人々との雑談で感じることは、農作物が荒らされたり、頻繁に出没するようだと気が休まらず、特に食害を起こすクマは駆除してほしいと願うが、何もしなければ、いて当たり前、という感覚だ。近づいてほしくはない。かといって「いなくなってしまう」とも思っていない。

農業被害や出没頻度に伴って、その時々でクマに対する受け止め方も揺らぐのかなという印象がある。その「揺らぎ」は、その時々状況、すなわち、「平時」「出没多発」「食害発生」という段階によるところが大きいのだろう。

一昨年、札幌市から委託された猫友会のヒグマ防除隊員として活動した際、白川地区の巡回をした。市民が自然に親しむ「白川市民の森」

が近くにあり、その安全確認のための痕跡調査だが、この立場で、農家の方々と接したときも、「あの沢に」「あのあたりに」などと、整理されたものではないが、過去から蓄積された貴重な生息情報をいただいた。クマの生態について、詳しくなくても、科学的ではなくても、地域の自然に日常、丁寧に接している人々の視点や情報は無視できない。

白川に暮らす人々のヒグマ観は、「気持ち揺らぎつつも、あくまで日常」であり、そんな意識が垣間見られる地域でもある。

●ヒグマの会役員（任期は2015年3月末まで。今年11月総会で改選予定です）

会長 金川弘司 顧問 阿部永

副会長 小川巖、山本牧

理事 櫻井直樹、岡本允志、佐藤文彦、安原政志、山中正実、間野勉、井部真理子、坂東元、佐藤喜和

監事 沢部勝、神武海